

凡例

- 1、森鹿三研究と本研究の対照では、『茶道古典全集 第二巻』所収、森鹿三『喫茶養生記 原文・現代語訳・解題・補注・年譜索引』所収の建仁寺本(建仁寺両足院蔵板本)を底本とし、同系統の史本(東京大学史料編纂所影写永仁五年(1297)抄本)および群本(群書類従所収空阿蔵本)を以って校合した再治本を底本とする。また史料引用部分については、同書所収の初治本および再治本を底本とする。(淡交社、1958年7月)。
- 2、本研究の考察に古田紹欽『栄西 喫茶養生記』(講談社、2000年9月)を底本とする。
- 3、本研究で「茶桑経」に関連する記録を考察するにあたり、『大日本古記録 蔗軒日録』(東京大学史料編纂所、岩波書店、1953年3月)を底本とする。
- 4、本文中、中国語文献からの引用文は繁体字で統一する(一部簡体字も含む)。論に関わらない引用文は注釈を省略する。
- 5、薬用歴からの考察で使用する『本草和名』は、大医博士深江輔仁撰『本草和名』(寛政丙辰春開鐫)、『本草和名』上下冊(国立国会図書館蔵本)を底本とする。
- 6、『医心方』は正宗敦夫編纂校訂『医心方』三十巻(日本古典全集、1935年1月)を底本とする。
- 7、『長生療養方』は釈蓮基撰進「『長生療養方』二巻(続群書類従巻898(富士川本、京都大学付属図書館蔵、寿永三年(1184)三月)を底本とする。
- 8、『小右記』については、『小右記 四』(『大日本古記録』、岩波書店)を底本とする。
- 9、『台記』については、原水民樹『台記注釈 久安六年』(日本史研究叢刊40、和泉書院、2021年11月)を底本とする。
- 10、本文中年の年号表記は、日本・中国年(西暦)のかたちで示し、年の字は省略する。
- 11、引用文は前後に行間を設けたが、引用参照文の場合には行間を設けない。
- 12、引用に際して、書名には『』を付した。(中国の文献については、《》もある。)
- 13、〔註〕は原則として各章にまとめた。年号表記には年を入れる。
- 14、〔参考〕は本文中における資料紹介として、前後関係を考慮して挿入している。
- 15、引用文のふりがな、返り点などは、原文のままとした。
- 16、研究者については敬意を示すため、「富士川游氏」のように「氏」を本文中に加える。
- 17、図表等の引用において、引用の関係から図表番号を変更したものを、断っておきたい。図表は本文の流れに沿って文中に表示した。
- 18、【附録】は、論文の流れに沿ってその章末に附した。